

学生が心理学のテスト問題を作成するとどうなる？

川野 卓二

(徳島大学 総合教育センター)

目 的

多くの大学ではアクティブ・ラーニングの手法を利用した授業展開が頻繁になされるようになってきた。それぞれの授業にアクティブ・ラーニングの要素を取り入れることで、学生が授業に対して能動的に関与することが期待されるが、その成績評価に際しては、まだほとんどの授業において教師が主導権を持って関わっているのが現状であろう。成績評価のプロセスにも学生が能動的に関わる一手法として、学生にテスト問題作成を担わせることによる効果が期待できる（青木ら、2016）。本報告は、専門学校生に課した期末試験問題作成課題の結果に基づいて、学生から提出された選択問題を整理し、その内容について分類・考察を加えることを目的とする。

方 法

筆者が A 専門学校（2クラス：各 41 名）で教えている「心理学」（2 単位）の授業において学生に対して期末試験用の問題作成を課題とした。できるだけ易しいと感じられる問題（しかし、正解率が 100% になるような問題ではなく、80~90% ぐらいが望ましいと説明した）となるように 3~5 の選択肢がある問題を作成し、はっきりと正解となる選択肢を明記しておくようにと課した。教科書の各章にそれぞれのクラスから 4~5 名を割り当て、各々が 3~5 問ずつ作成するように伝えた。授業終了の 2 週間前を提出期限とし、授業最終週にどのような問題が集まってきたかを学生に伝えることを約束して、課題とした。

結 果

学生全員から問題が 274 個提出された。（平均 = 3.3 個、範囲 = 1~5 個）そのほとんどの問題は、択一式の問題であった。複数の空欄を埋める問題は、空欄 2 か所問題が 3 個、空欄 4 か所問題が 1 個あった。また、それぞれの選択肢数は、2 選択肢問題が 2 個、3 選択肢問題が 70 個、4 選択肢問題が 111 個、5 選択肢問題が 91 個であった。質問文が同じもの、もしくは意味が似ているものを削除すると全体で 219 問になった。

その問題の提示部分がどのような属性の質問

として構成されているか整理した結果は以下の表のとおりである。今回の課題は選択問題の作成であったため、Wi len (1991) の質問の分類に従えば、収束的な解を求めることが期待されていることになるが、高いレベルの思考を要求する問題はなく、提出されたすべての問が、低いレベルの問題として作成されていた。

種類	Type	問題数
何というか	What?	170
どれか	Which?	49
誰か	Who?	31
いつか	When?	15
どこか	Where?	7
いくらか	How many?	4

※「いつか」と「どこか」の二つを尋ねた質問数がそれぞれ 2 問あったために合計数が 2 大きい。

考 察

学生が試験問題を作った場合、What, Which, Who といった質問が多く作成されており、これらはすべて事実に関する記憶についての問題となっていた。Wi len の分類では、すべてが収束的な解を求める低い思考レベルの問題である。今回、実際の試験に 11 問を使用した。その結果、3 問が課題の条件を満たす 80~90% の正解率であった。あとの 5 問が 50~70%、3 問が 40~50% の範囲に入った。学生にとって、自分以外の学生がどの程度その問題についての理解がなされているかの判断が難しいものと思われる。

疑問詞を用いた単純な質問にも、Why?, や How?, In what way? など、高いレベルの問題として作成することも可能なものがあり、学生へ課題を提示する際に注意することで質の高い問題を得ることができるように思う。

参 考 文 献

青木 雅子、奥野 順子、関森 みゆき、日沼 千尋、櫻田 章子 (2016). 学生が試験問題を作成するアクティブラーニングの展開. 東京女子医科大学看護学会誌, 11(1), 54-60.

Wi len, W. W. (1991) **Questioning Skills for Teachers (3rd Ed.)** (NEA)